

1. モンゴル 2. スイス 3. サウジアラビア 4. スリランカ

1. 衣類やせんい品の輸出割合は拡大し続け、2010年代に入っても軽工業が経済成長を支えている。
2. 工業化を断念し、精密機械や自動車などの輸入を増やすことで内需主導の経済へと変化した。
3. 輸出総額が30年あまりで約29倍に急増し、機械類が輸出全体の3割を超える最大の項目に成長した。
4. 船舶の輸出が大幅に減少したことを受けて、現在は石油製品の輸出が最も多くなっている。

1. 日本 2. 中国 3. アメリカ合衆国 4. インドネシア

1. バングラデシュ 2. スリランカ 3. インド 4. パキスタン

1. 海上輸送に便利な立地を活かして、原材料の輸入や製品の輸出、海外からの投資を円滑に行うため	2. 内陸部での急激な人口増加を抑制し、都市部への労働力流入を制限するため	3. もともと沿岸部には高度な伝統産業が集中しており、海外の技術を導入する必要がなかったため	4. 内陸部の深刻な環境汚染を避けるため、比較的環境規制の緩い沿岸部に工場を隔離するため
---	---------------------------------------	--	--

1. 1950年代にはヨーロッパ州よりも人口が少なかったが、その後の急速な工業化によって21世紀までに世界最大の人口規模となった
2. 人口の絶対数は世界最大であるが、一人っ子政策などの人口抑制策が全域で徹底されたため、1955年から2015年にかけての増加率は他地域より低い
3. 20世紀後半から21世紀初頭にかけて、経済発展に伴う少子高齢化が急速に進んだため、統計上の人口規模は縮小傾向にある
4. 世界の地域別人口の中で一貫して最も大きな割合を占めており、食料生産の拡大や医療の普及などを背景に継続して増加している

1. 両地域の時差がほとんどないため、現地の人々とリアルタイムで同じ時間帯に共同作業を行うことができるから。
2. アメリカで日中の業務が終わった時間帯にデータを引き継ぐことで、インドの昼間の時間を使って24時間体制で効率的にデータ処理を進められるから。
3. アメリカが休日である間にインドも同時に休日となるため、双方の労働者の休日を揃えて計画的に業務を停止できるから。
4. 時差を利用することで、アメリカからの製品の輸送にかかる時間を大幅に短縮し、速やかに商品を届けることができるから。

1. 国内の工業化が進んだ結果、製品を自国で消費するようになり、1980年代に比べて輸出総額は大幅に減少した。
2. 経済成長に伴って貿易総額が増大し、主要な輸出品目が米などの農産物から、機械類などの工業製品へと変化した。
3. 経済成長とともに輸入が抑制されたため、米などの農産物の輸出に特化し、資源輸出への依存度が極めて高まった。
4. 貿易総額は増加したものの、輸出の主体は依然として原油や米などの一次産品であり、工業製品の割合は低下した。

1. 沿岸部での塩害を避けるため、乾燥した内陸部での生産が不可欠だったため
2. 鉄鉱石や石炭などの主原料の産地に近接して工場を建設することで、輸送費を抑えるため
3. 海外からの原料輸入を容易にするため、大型船が接岸できる港湾設備を優先したため
4. 製品の主な輸出先である近隣諸国へのアクセスを改善するため、国境付近を優先したため

1. 資源ナショナリズムの考えに基づき、自国の資源を保護するために外国資本の流入を全面的に禁止する。

2. 輸入代替工業化を推進することで、工業製品の輸入を停止し、国内市場のみで経済を完結させる。

3. 地球温暖化対策として石油の採掘を法律で禁止し、伝統的な牧畜を中心とした社会に回帰する。

4. 将来の原油の枯渇や価格変動のリスクに備え、特定の資源への依存から脱却して経済の多角化を図る。

1. 人口の約9割がキリスト教を信仰しており、日曜日には聖書を読む習慣がある。

2. 人口の約9割がヒンドウ教を信仰しており、牛を神聖な動物として肉を食べない。

3. 人口の約9割が仏教を信仰しており、特定の民族と強く結びついた独自の神々を祀っている。

4. 人口の約9割がイスラム教を信仰しており、酒や豚肉を口にせず断食の期間がある。

1. 広大な牧草地を利用した羊肉の料理が中心で、小麦の粉を練って焼いたナンを主食とする文化。

2. 長江の下流域で獲れる魚介類を主役とし、素材の味を活かした砂糖と醤油による甘辛い料理。

3. 盆地で生産される大豆や香辛料をふんだんに使った、マーボー豆腐などの辛みの強い料理。

4. 小麦を主原料とした皮で具材を包む八宝菜を中心とした、蒸し料理や煮込み料理。